

• 0 1 2 3 4  
• 1 2 3 4  
• 5 6 7 8  
• 9 10 11 12  
• 13 14 15 16  
• 17 18 19 20  
• 21 22 23 24  
• 25 26 27 28  
• 29 30 31 32  
• 33 34 35 36  
• 37 38 39 40  
• 39 40 41 42  
• 43 44 45 46  
• 47 48 49 50  
• 51 52 53 54  
• 55 56 57 58  
• 59 60 61 62  
• 63 64 65 66  
• 67 68 69 70  
• 71 72 73 74  
• 75 76 77 78  
• 79 80 81 82  
• 83 84 85 86  
• 87 88 89 90  
• 89 90 91 92  
• 93 94 95 96  
• 97 98 99 100 JAPAN

繪本拾遺信長記

後篇

七



還  
2307  
23-20

繪本拾遺信長記後篇卷之七

目 福

信本源市志摩方に即降參之奉

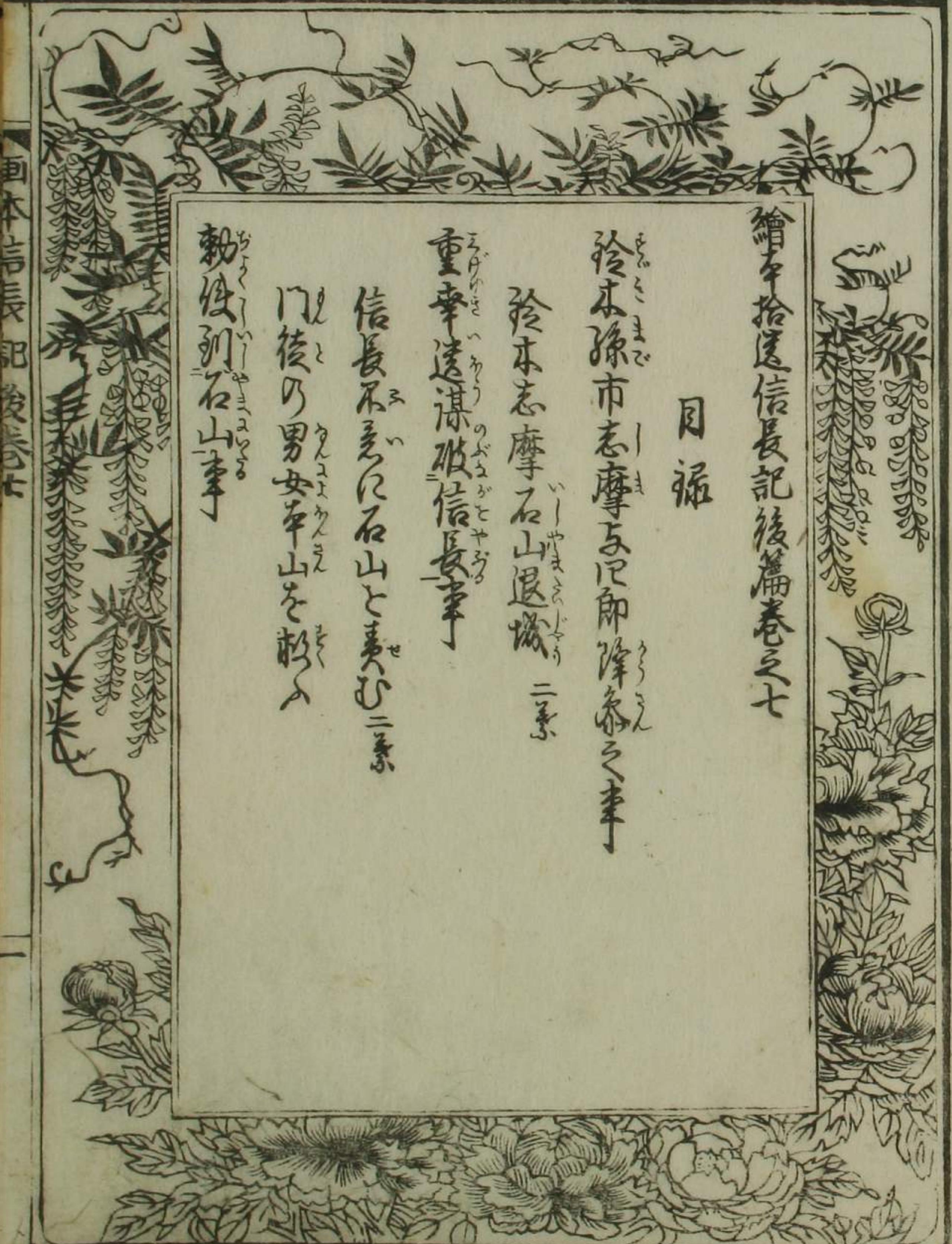
信本志摩石山退職 二系

重幸達謀破信長奉

信長不意に石山と美ひ二系

門後の男女平山を救ひ

勅使列石山奉



繪本拾遺信長記後篇卷之七

繪本源市志摩与尼郎降系之奉

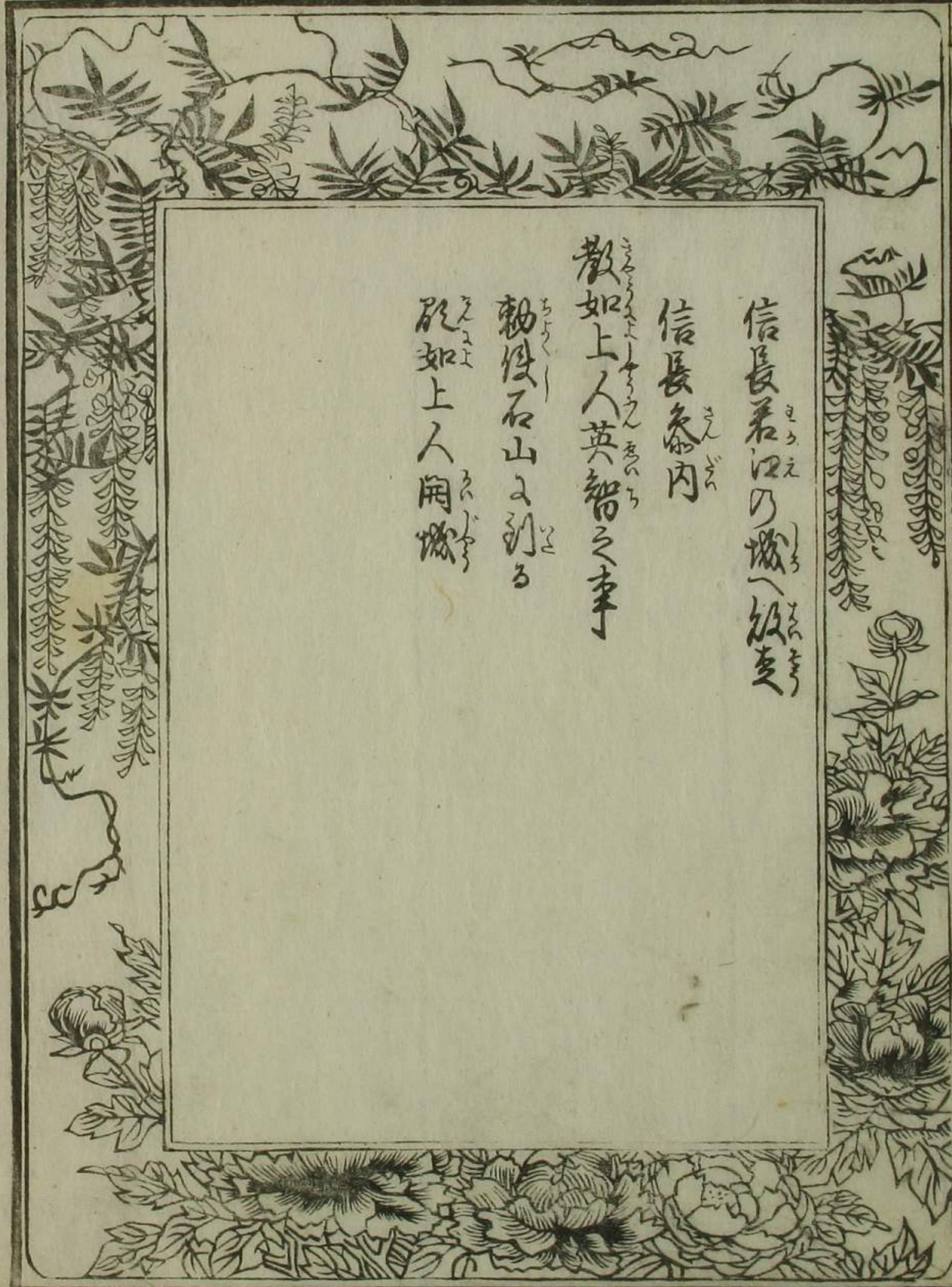
去かどよ石山の城中より軍師重幸小波よりの合戦より入る  
柱石とたのまく勇ぬ根来の小畠英と始りヒハ八百餘人の  
兵卒と失ひ英と換ひるのまちに以此後信長大軍と廻く  
夷来くばくろへしき防戦も是東よく今ハ歯山落城家門退  
船の附節ふ来くたゞ小やと上人をもじら年くせ一城の取手  
後の男女よむくまく歎きうなまざる者より附よ繪本源市  
志摩よに郎の兩人上人の御差を出で源又くよ言ヒテシテ  
ハ今度を幸小波水の合戦より死と遂げり一ノ源き忠義  
と名づ歯山承久の計よりて家門繩島の基よりへどさら

信長君はの城へ殺す  
信長象内

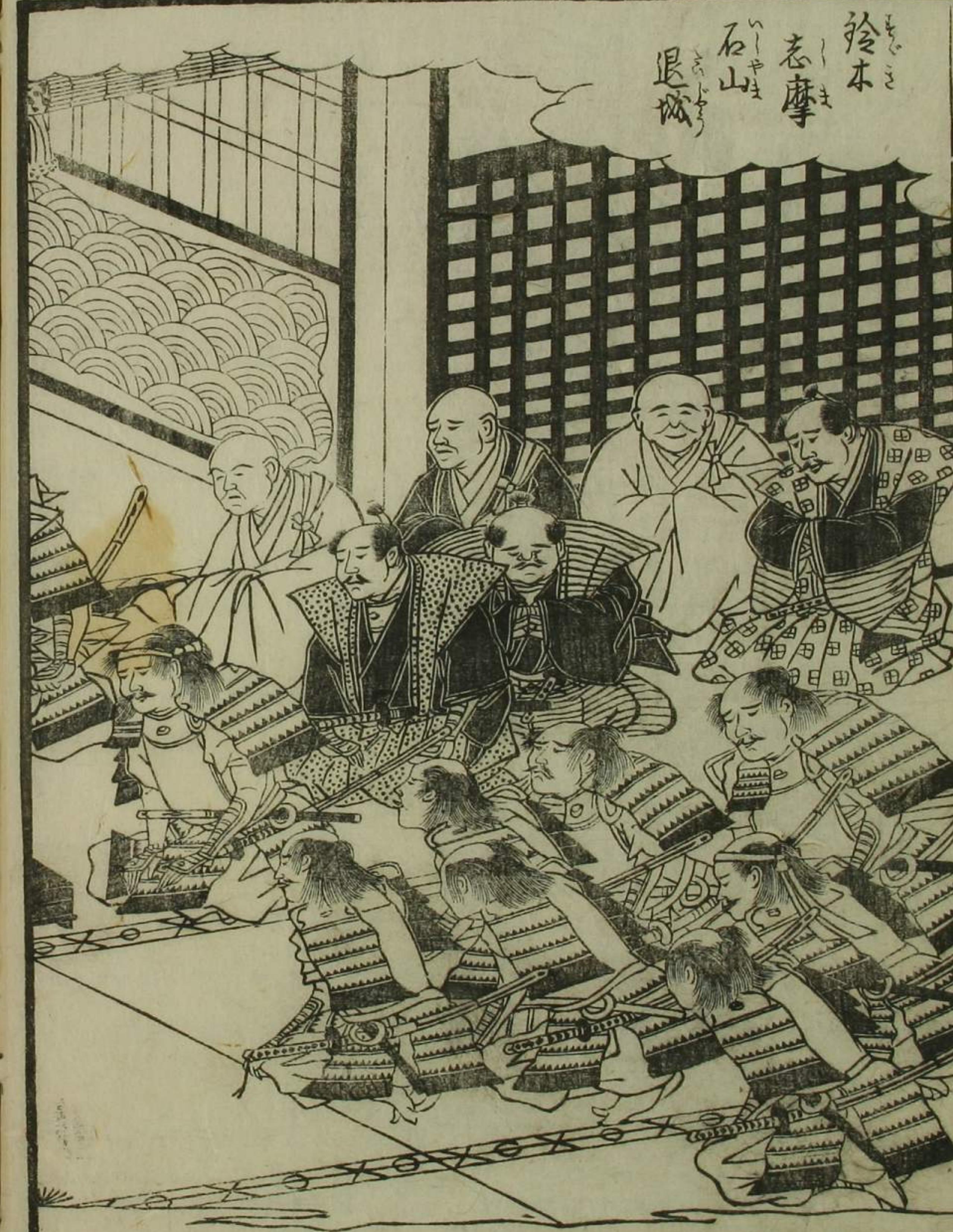
敵如上人英智え奉

朝は石山と別る

敵如上人用敵

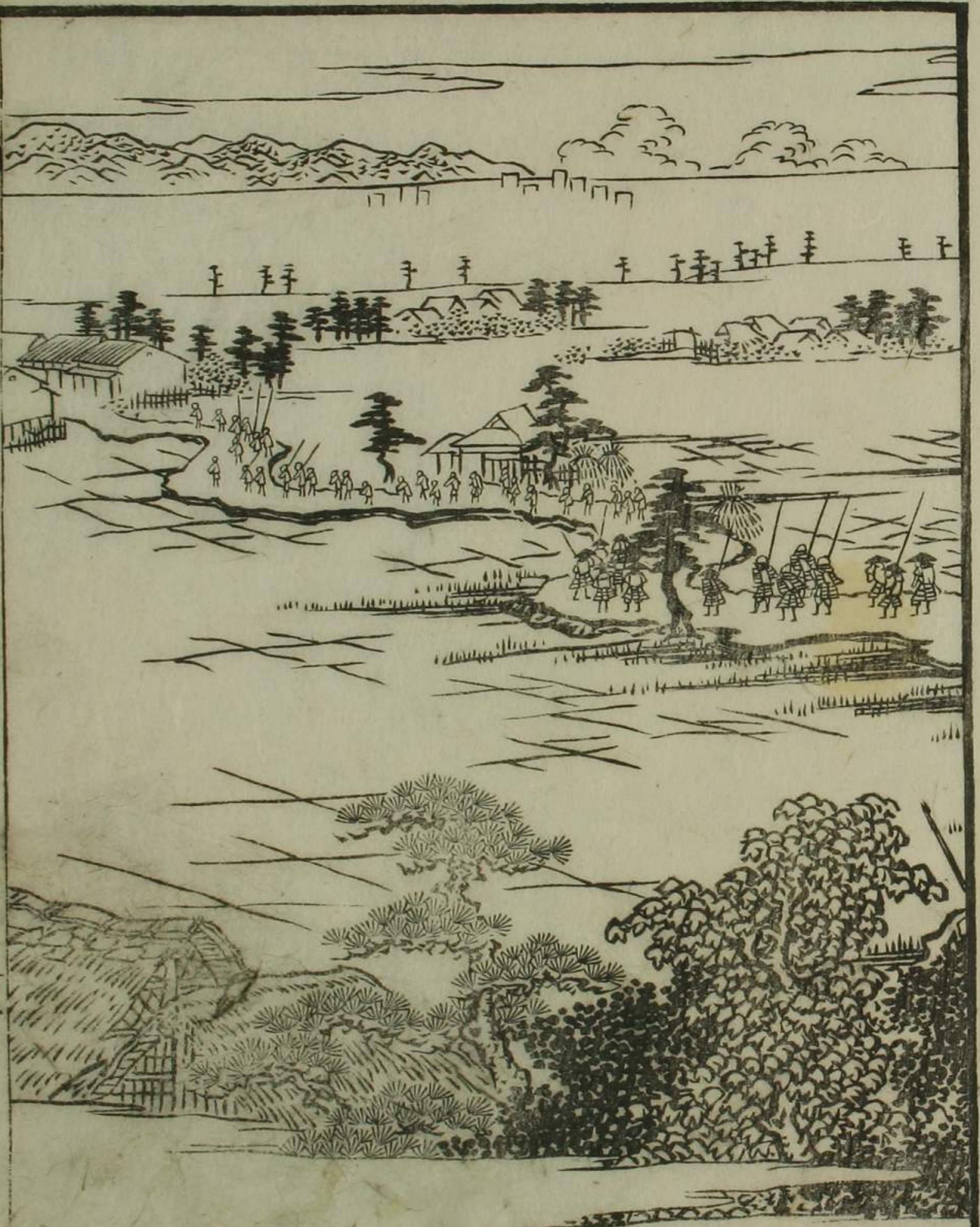


繪本  
志摩  
石山  
退城



御悲傷の後ひまじくこそねりへ重率小瀬み出津の付よのぞ  
昌家兩人より送言の密書とめし歴宗門不退船の遠計を承  
えんとて其遠書の詔ひを率協中よりす謀とひし信長が軍  
を破りあぐらく承携乃向よ威と震ふよ仰てうもべどり信長  
天下の武能上へ天よの補佐と下り多民よ政と布行ひ智勇  
の臣下數百員調殊の兵士百万ありを率多御方よみて小さく  
会の勝利を得るに味方始終の勝ゆつてばいよ／＼信長の勝  
を信長せしら遂には畠山滅亡せんゆ短ひ反し信長が勝じて  
ひを率からりて率級軍にて討死す／＼と安うば彼が典うの軍  
と解合し且源市と足利貞秀と先にし紀州の兵士奉へて城を出  
信長よ源家と＼＼毛又信長が妙うの二かと解合し信長が

妙うを傍ほ者ひ甚危く妙うと解ひ味方の利をり是保昌家  
率が恩見よあくび原くと家祖親聖人の靈覆よ感じて  
こそ討死を遂てはしこま／＼書拂してひ年ぬ尚此後信  
長畠山よまえゆるやうに防ぎまゆべき謀計殺柔我とよ  
拂ひりひを率殺命の附と口どくひつと龜城にさらまけ  
ひくはな候せ候よ臣よ外よ支々畠山安寧のを御ともじり  
名あこそ盡びとく禮の神を教よ拂ひてさく／＼と教さ  
けよば上人ひどうひの御いらむく御勝び済よもせび難ひけ  
るぞ御廟つきあうさまからえり上人の歎味方の祀をせすを



其二



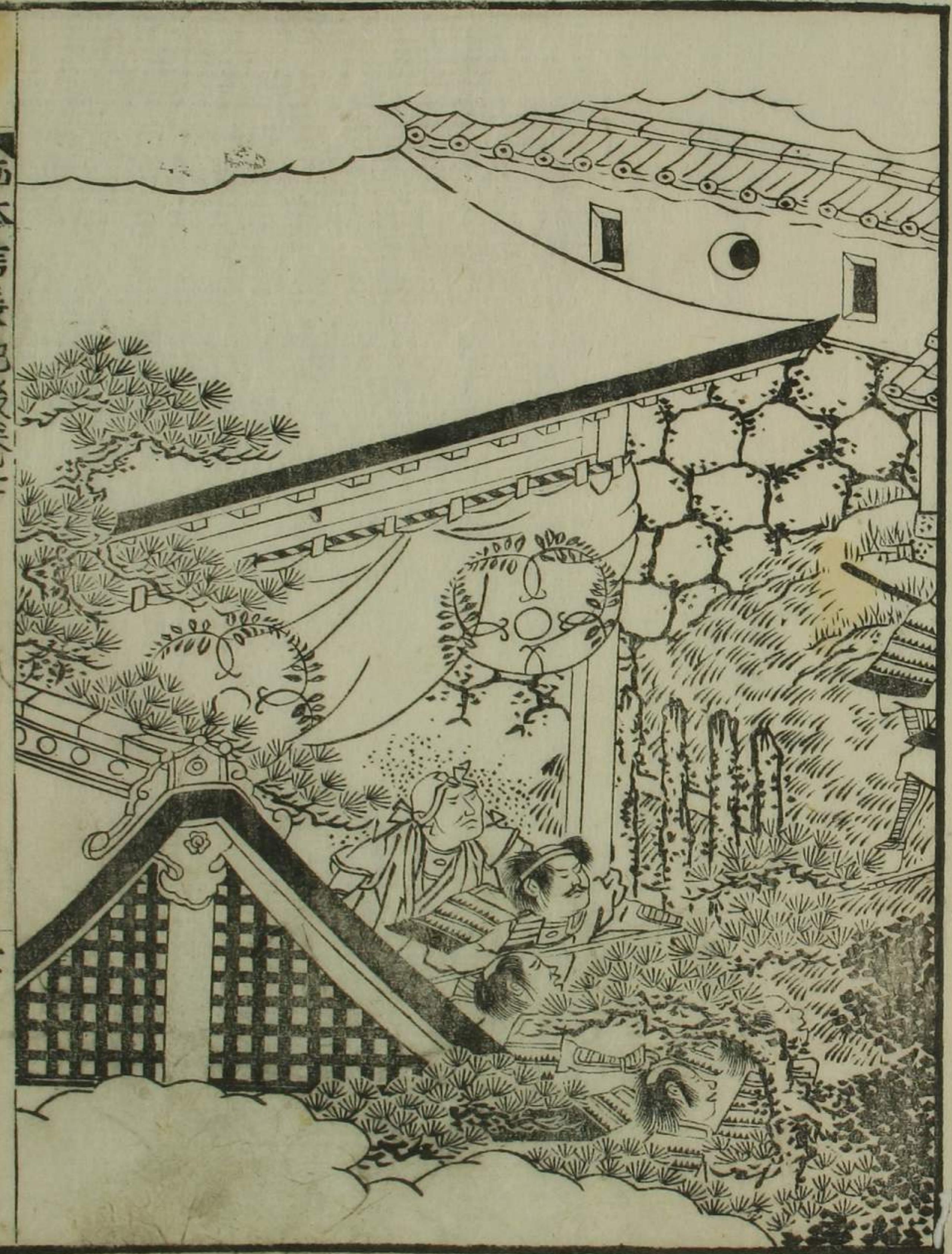
懸を絶ひ、かくも一て信長が勢いと止めたと、山と退き、  
主に平山と建て、ひそむと、宗門の裏櫻とよんやとつて、  
合戦をいとひ、ちひ、主はまは、主はまは、主はまは、  
燃をとをえ、免へ、残ひ、御脇の兵と下を其日、經て御脇にあり  
て、免へ、名残を惜み、うり其聖朝孫市と、即紀伊國の兵士三  
余人を率へ、城と出て、難がたに帰りやぐと後者をみて、信長、源  
氏の局、殺ひ、うるふと、信長板の此程の合戦、石山勢利と失ひ、重  
幸が討死へ、うるかすすり、今叶ふほど、とく降参せらう、或ひ是と  
き、幸が送謀、かくもんもあらび、先渠が乞ひ、任せ、を勧諭  
と、誠んと、以後、歎射とほと、の、死、と、血刃へ、若即へ、と、海が、重  
々々々、難がたの、は、と、敵としと、かかへ、後へ、孫市と、即り、  
かくもんもあらび、先渠が乞ひ、任せ、を勧諭

こまう死、逃文と、献へ、乞う、信長の幕下、又屬へ、

重幸、遺謀、破信長事

信長云此わ節中、圓表不く、仰もづびの、ゆ、向うきの、く、に  
橋州の、園の、燃え荒木村、津守村、吉瀬村、守村、吉瀬村、  
石山、北野寺、く、合、祥、では、勇く、發、大、ゆ、ち、り、と、て、討、ゆ、の、軍、兵、と  
を、され、て、緩、兵、急、又、夷、と、せ、絶、ふ、又、石山、然、と、お、と、そ、並、け、る  
上、人、元、東、重、幸、が、計、畠、の、ぞ、く、い、う、と、し、く、信、長、が、勝、い、と、教、じ  
家、門、本、安、を、祈、そ、絶、へ、石、山、す、う、へ、尚、ひ、く、よ、向、ひ、せ、だ、天、正、七、年  
荒、木、村、を、勢、ひ、盡、と、有、圓、の、燃、と、用、き、危、脅、又、夷、外、遂、え、滅、こ、  
れ、よ、び、松、澤、一、國、平、塙、へ、と、き、ば、年、未、の、う、ミ、石、山、を、夷、滅、と、  
紀、州、の、浪、人、と、く、く、々、退、燃、で、よ、の、方、主、原、の、外、多、に、立、着、り、之、

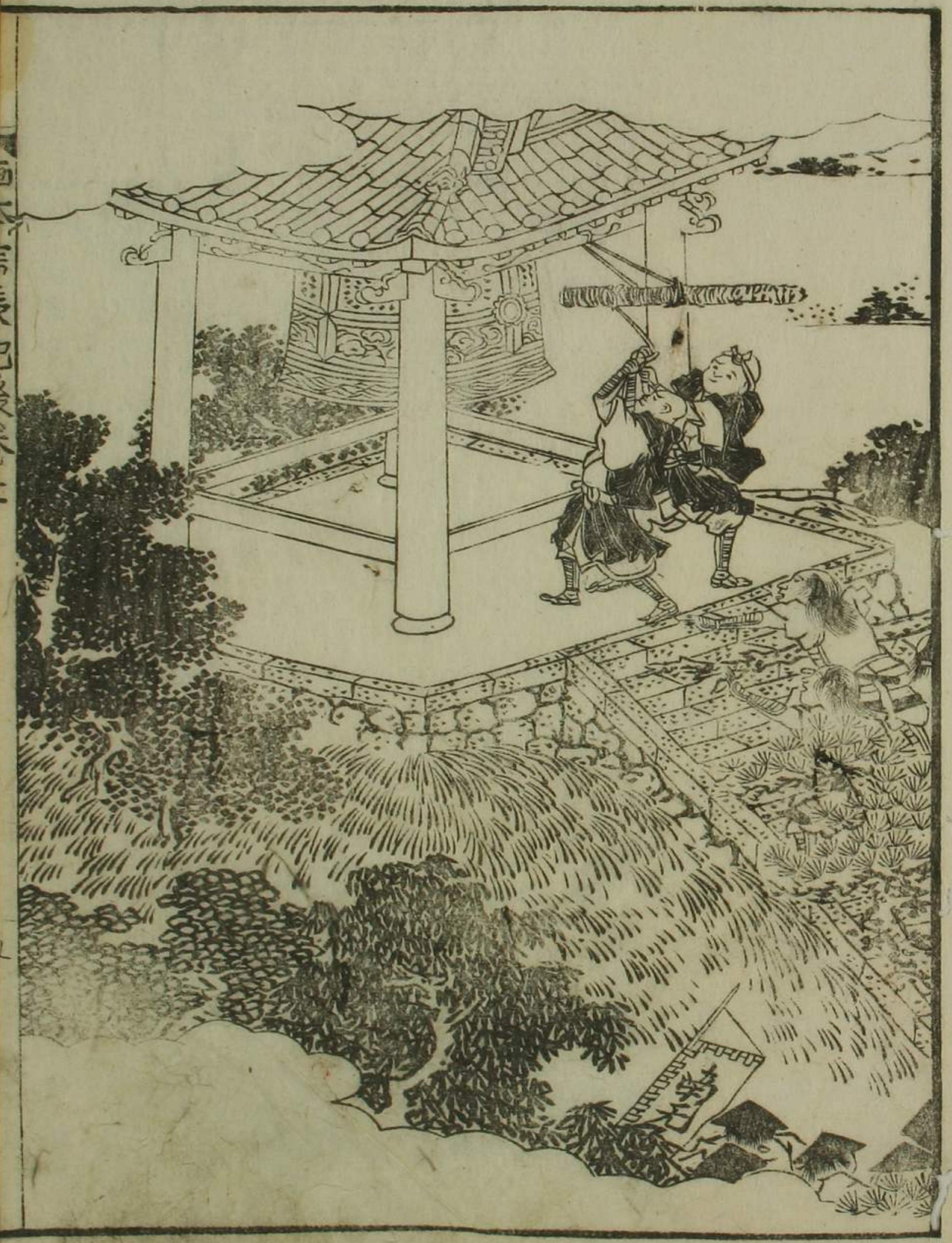
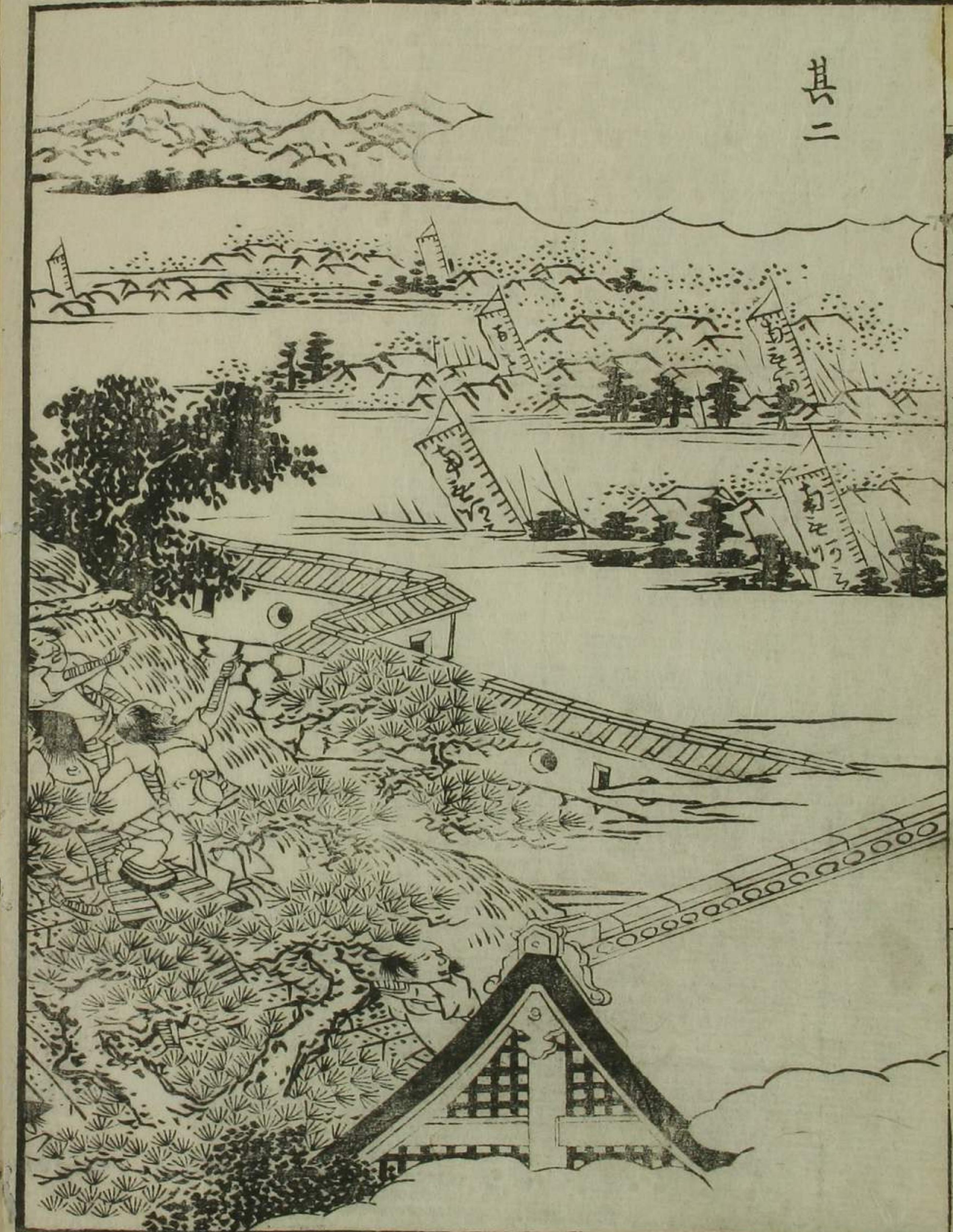
信長  
石山と  
不善  
美む



次只一擧よ踏くべし。宿怨と教さんものと二万餘騎の軍兵を率く。燐より俊吉より陣をつゝ林石山へ押寄らる。此の石山の城中には去年己未に信長の勝りと教へてある。又山圓へ軍馬と出されし附も山圓より別れたり。此後とて、未だるまじと安堵して居た。然る大軍を表達ぬまば上人を招き城中の湯屋大き小移き賤きうすすり信長の家門と破滅させんが飽くほ。此上の面く家者のあら小命と捨ん。何のま細々とやと我そとよ寝立てうげうけ失倉。又鉄炮の首先を捨て精兵をそそぐて矢接のひくと並居ま命のきうふせだ。獄へと片喰と飲で死け。去るほどに小田の軍兵信長がまびき下駄。勇氣と欣いし間の笠山岳と勤し。唯一つと柵隙とを相圖や。立ちあんよ縛をゆひゆひと其妙教坐よ織は。抑石山本願寺の縛り石恩澤の名縛と其妙ひ。美縛の良也と呼。遠く郷音く。世に歎は。少納言信西入道の語あり。今度の本願寺の事に却て。久しく去ゆ。又隠りてと隠。上人石山の本堂建立の付。本願寺の事の告。又す。極めてか。本願寺よ遷り。擱させ給ひ。其語と曰く。

夫慶隆寺者上宮をす。監督之秦川勝草創之奉朝之

其二



佛法爰始此地繁昌彼今靈慈等言語道斷幸在示記  
不須後說於是久安六年正月十九日仁祠忽逢田獵  
之殃住俗室闢棗巴之御難憑靈寺之爲所唯感慈佛  
之免燐方今佛閣僧院鐘樓經藏惠易基趾新加修復  
洪鐘即作铭曰

鳥氏呈巧 稔範既成 朱火吐焰 赤羽殊精  
雄龍舉角 鰐魚發聲 秋風夕轂 扑霜秋鳴  
聞有頃上 達無向城 蒼捲曉至 忘想眠驚  
速持三下 利益已生 宜成法器 乾據操名

少納言信西

此附源市志摩与に郎の兩人の信長の臣屬於少納言  
仰りてえせども心中には石山の守護さうかうかのく  
童卒が遺書の計略よまうせねみり門後を語りし櫻経吉  
平野小堀は櫻並ハケ不天満の森福修川分口の石山又三百又  
百をうち原了近信長不付又石山城へおきらば相圖の狼煙  
とあげて諸方の門後うけ合せ多く防ぎあゆべこ前ト後  
とばうのあうせのよ達と變と多しく男女老少がのきしき  
武り竹槍のうひりかうやかたれま強引うげてうけ出せと老  
うち女初に見えども我方らじと勝ひと己が家門の烈歎小  
田信長およりて拓き殺せよとく我もくと加勢と口に渴  
面門後乃援兵雲のぞく紀伊立岡を據り強砲と櫓砲せ松  
明のひう天ようやき喚き叫んと巻よどりが小田の大軍

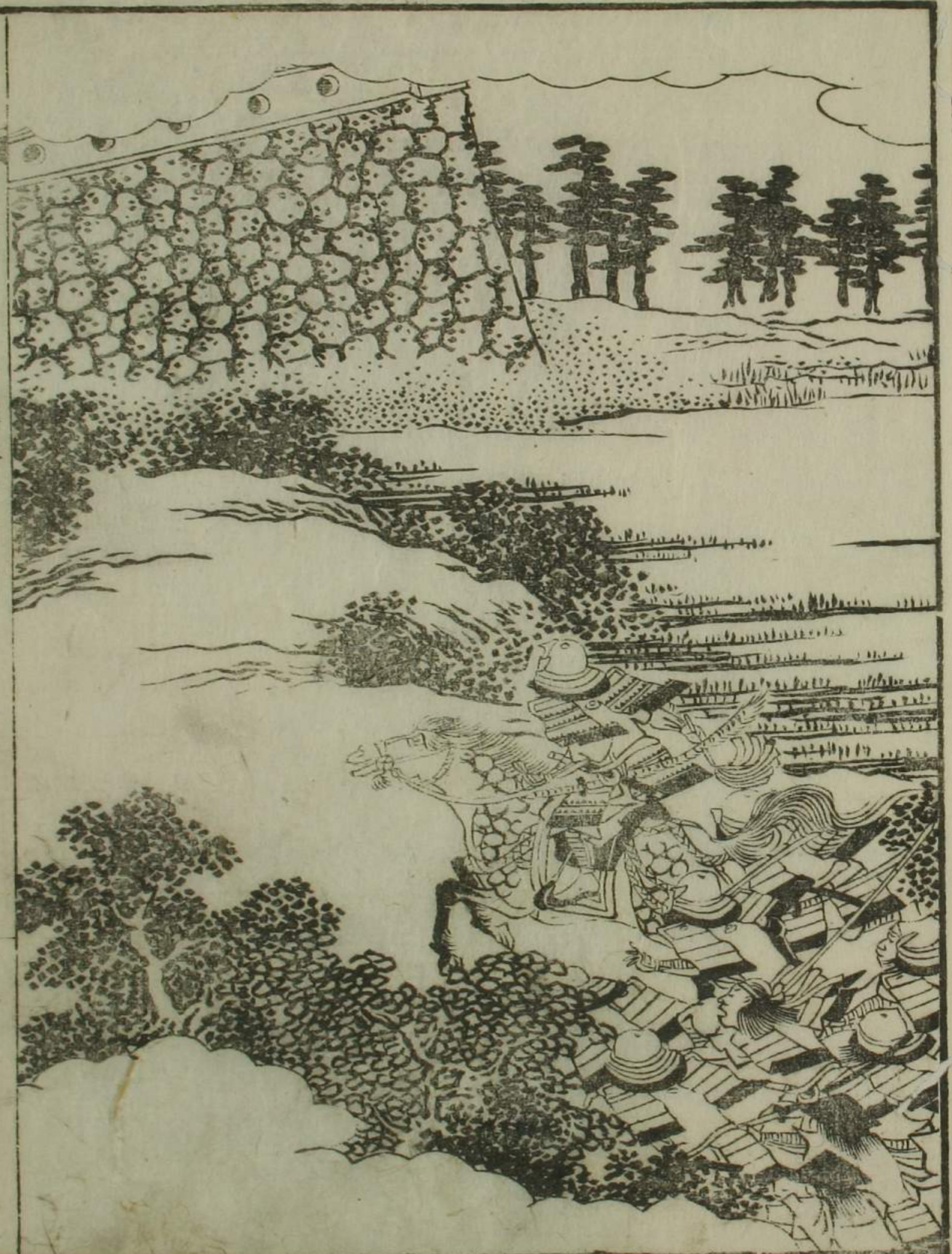


大手小手をさとひや門徒數の例の伏兵にあひうきめあ  
えんよう引やくもつてごそひと馬りの具もお捨てまう  
はの方へ遠くよ逃げゆるたる信長と勢の崩き逃るよ詮  
方々心からじと若のり燃へ引へ終ふ

### 勅使至石山奉

叔と信長と数年の合戦より石山を援め猪りに剣へ戦へ事と  
勝利のちく見ぐしき故軍のもうしひと本願寺とふくと強ひ  
天正八年の正月と落あつて僧奉に就く拳圓ありするを柳  
島信長石山本願寺と合戦年とすと王將近く御戦と震  
朝延の恩とちよづととども先全く私の腰にあひて信と  
不肖のふうれども諸國の歎後を孫代へ七道と辛げ王將と

侍ら奉るの功とすりて高官と叙せられ希代の朝恩を蒙り  
まことに信長謀害とむげまに漏を卒活せんと欲すとおもと  
して城役と討りぬ不勝とひどくひどくもるるをばくと云ひ  
ほしとし金く勅使のをきとほが改め載くが承たり從る小石山  
か教寺の門役等勅命と背き伏兵にて信長と敵對  
あたへ勅使達ひ天子と弓と引く朝歎よばくとて何ぞや  
信長ひて石山の地と一揆と築き西國の連絡と押へ震懾を  
泰山の妻とよゑをもとと計る小僧のふとして國の費と民  
のふしとをツアリスと車載をねひゆ豈佛者の行ひと云へ  
免や信長大きふ武威とよやし彼石山と夷漢人のを難き不  
にあひてとも當今と對へまく御功勞をしする能ればれ



信長  
義  
勝  
級  
主

齋の詔さと思ひ理不盡のゆを用捨にしてそれありて信長は  
すくと天子の政事と構つて海征役の大任と頼むと之  
と僅よ石山の小城ひと内法師百姓とまことに旅りばと云ひ  
何とて西海関東の強敵をに天下泰平の功と立んや先づ  
朝威の高きが如きを速々勅定ありて於かみは彼地と退去  
仕へき宣命仰て下さるべき余勿論よりと此て齋の齋  
叶へせ終りと云ひうかせん信長一世の力と歴し余攝のるゝゆ  
を放ちに方三十里が間に燒かし人馬疲たるを悉く  
乞へ捨りて出焉よらしく奉はれりと腰ぬば食んで奏  
せらるる乞ふ候て傳奏とぞうの御坐よりくのく御坐より  
き落ひ急ぎ其旨奏を終へ當今正觀町院に良齋と若  
い修寺中納言膳を卿石山へ下向ありて左近を又せなひ  
卿齋修寺中納言膳を卿石山へ下向ありて左近を又せなひ  
信長は左近を應じて小田中納言左近を又せなひ  
万民と若しもとよりは門傷後の行法にあらずに速々山と退き  
抄ひく退去の餘痛もとより理りかうとつども強て拒む障る  
附り宗門被滅の基なりと申狀をへ當地よびづぐに何  
國よりとが寺と再建へ宗門不退居の計ひこそをほじ



此より歸く齋戒とくらしより勅使は下さるゝ所たりと定え  
猿人が上人達でうけ終り勅使のとく法師のとくと教説  
防戦ヨ及ぶるの後のるて背く余恐き入でりへども抑我宗  
門の法とどる爲に承せん度く衆まと滅度近ま恩婦とくと  
従室の素懷をとげ長く渴世のくらしへとのどへりうん餘院の  
誓願されが當時秋家門と破滅せうんと軍馬としもけれ  
信長こそ佛歎法歎餘院の利御と云ひてき信心堅固の  
門後とゆえまことにそ佛ゑに順ふ宗門の奥詔うそい信  
長如きの大惡人長く此世よ草うがまと焼修尼と殺し絶え  
へ因出として妄圖地獄ニ落へてもむしまほ我國の佛法  
發配終し聖德をより法歎守候たると傳へ經又法祖と

仰き終ふ殊に幽山の聖徳左近の告命よりは蓮如上人幽山の  
靈場うれび不徳の然なりとくとも法軍と率て信長と戰  
ハ聖徳左近も旗先にゆひ我軍を助け終ひて況や信長が  
暴惡守候よ勝手う勅をうへきり小懃うとくども今この  
然ひかを信候のにくらうく佛ゑにそらく軍よあれば  
とくとも善玉の下乗去の渡王去よらうがるは勅命の重  
きお思き宗門退廻きの詳議とく謹ぐ勅言はしむるに  
と恭へく實へ猿人両郷も於上人の高論よ感ぐ多ひ其  
旨すばやくれて原原に終ひう

教如上人英智く事

石山の城中うはそひ受けざる勅使をゆく如上人其家臣



下向雲木津櫻田多喜八木平井のひとと集めらるまきもぐ  
議あらうるふ信長數年合戦より刑をもひ勅命を備て山を  
奪ひえと計るやゑんづくさんども嘗天のト王命ともむ  
きちゆみかびに附退去の儀勿論よりりんれ去じよぐ信長  
義理定まぬ大おもて先年深井朝倉の両家と仰門で和解  
をほし附と見て忽よまえさせし武雄の人うれば上人附又と山の  
要害より即ち石附は犯つてまことと計るもあくびに信長  
幽室門よねひく御も達限これよき折妻書の血刑一禁蒙廷の兩役  
徳人よ立せ終の上り附退去いもんじるまじくやと一はよやけ  
まば上人もこれよ日ごろひ信長が折妻紙心えうたすよあれど  
勅命のまきとへふせんと復讐をなす西郷の両方と右の親

委へく勅命也しおひされば禁庭もうヨヌ此が公信長へ名をひ  
らる信長伏脱がるゝに石山の地を退去せらゝとよゆして山門  
の儀の如論上人又よ希に門下の悟俗小もるまでよ細きよんに  
よく即折妻書と被ら血刑して本教寺へ送らるゝ是よりて  
本教寺より下向雲木津櫻田法眼教廉日が進伴之三人の  
和解帰り相とひのひ本教寺ふはち退去の用意を  
急げしるる先々信長心中よ尚も上人を恨み廢り於如  
文退去のよ勅命のまきが取て云うて我をもくら石山  
の地をもせー附連に退去せば達限又よあくびに信  
命の勅命も口書たりべー志る城敷ケ年合戰秋軍勢

を換ひ命よりへと彼地を退くほどとや暮が今唯一言の中  
又御掌にて退き去るに秋を極り涙ぐどもゆのうへとや  
ぐとぞひそじにぎたしひそ小物訓る兵士とぞとぞと  
武士の体よ出立せ上人の旗を出て紀州路を通うて海途中  
も斬殺せよとく其用意すらかうり家よ信長の弓明の  
人よ友ゆ城阿修とく人者あり先祖より堅固の親愛家なり  
ううが此密謀を定く大手小手きかくて川家門承く退院し  
開山聖人の御苦勞じぬくちうとてかと賜せん心驚いて  
終々法のゐて此密謀の次第をいたゞく石山へ若くうち承  
如上人を下りてあくせ家老門下の人々大不和るを信長  
かくのうと内謀ありとくとも表立するはれども勅旨(附)

和膳の儀御意やあげゆるとの今更遠慮のゆりあうごく  
されどく開城せば家老歎絶くとし生の後陽今母付へと  
をあくユキをめぐり終へて別如上人の沖嫡男光秀を教如  
上人此付御年いま三十三歳よりて終ふ御年とはやせ  
ども天性英才人よ詔諭明潔利口也にしきりども之を好む  
ゆゑり何よりれて心安らきとく又上人の勅命と遠隔く和膳を  
被りせば又人物すが朝歌の名のがるはじ先紀州難望まで御  
退をありて然れど只私ゆかひそじ和膳の儀も段も御相談せ  
えきかまく退城のゆり不心得の局被病して此城を軍兵と  
り小留りやうじて上人其身ね出立べきに秋和膳へとく  
ゑに郭門不向ひからず余言語を辭不發りしに勘當うじこ

弘化  
元年  
秋月  
用誠



仰あらく當地といそう小冲用きの後、先らが本門の勅命を  
率んと立退き後でも新門不忠不義と譲り扇まつて  
勤皇と隣ひをうじといふと云ふ信長我をうちより強くあつ  
て又上人と勝つてうそをうべー信長元より思氣ふら  
大ねうれいが新門爲櫻して退びてゑりいいろの謀計うらうんと  
あやぶく又上人の退き後途中まで狼藉があるまじきう  
るまじきうるせの入膳されば上人に伴贈一友人と引合  
ひそく小船を出で紀州路の森へアセ移し退櫻の日又引  
てハ御奉物どうと實しくお別れ」ととて改められた  
途中又信長の伏兵ありととがくのでとく詫るりのうへ何  
の難いもひとと宣ひうる上人並に家老の面に此儀を

日ト猪ひさく其用えよやとくに於如上人の終ニ御斧子  
三人を石づきらと御おも健保の体又お主猪ひに月又日石山  
の塚をかく其夜の月塚のトボク方よ入るせ猪ひさく



